

# 日本作業療法士協会 海外研修助成制度

## 実績報告書

---

発表演題名：Problems in the use of prosthesis in children with congenital upper limb reduction deficiency in social participation situations

学 会 名：International Society for Prosthetics and Orthotics(ISPO) 19th World congress

会 期：2023 年 4 月 24 日～27 日

開 催 地：EXPO GUADALAJARA, メキシコ

氏 名：小林 実桜

所 属 士 会：東京都

---

### 1. 発表演題の概要

#### 【背景】

先天性上肢形成不全児が保育園や幼稚園・小学校などの社会参加場面で義手を使用することは、両手動作を必要とする作業が行いやすくなったり、義手の使用機会が増えることで操作能力が向上したりするなどの利点がある。一方で、実際の義手の使用状況、周囲の人々の理解や受け入れ、担任らの義手に対する考えなどは明らかでない。そこで、社会参加場面における先天性上肢形成不全児の義手使用実態、および義手を使用するにあたっての問題や課題の有無について調査することとした。

#### 【対象/方法】

対象は当院の四肢形成不全外来で作業療法を行っている先天性上肢形成不全児（以下、対象児）、および対象児が通う保育園の保育士、幼稚園・小学校の教諭である。対象児の定期外来の際に、児および保護者に本調査の説明を行った。同意が得られた対象児が通う保育園・幼稚園・小学校に資料を郵送し、web アンケート調査への協力依頼を行った。回答は無記名とし、アンケートの回答をもって保育士、教諭らの同意を得たとみなした。

主な質問内容は、対象児の義手持参の有無、義手の種類、義手の装着・使用で困ったこと等である。本調査は東京大学医学部附属病院の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

#### 【結果】

調査期間は 2022 年 1 月～7 月の 7 ヶ月間である。未就学から小学校 1 年生までの対象児が通う 13 施設、24 名の保育士・教諭らより回答が得られた。回答者は保育士 13 名、幼稚園教諭 4 名、小学校教諭 2 名、園長や校長などの管理職が 5 名であった。保育園・幼稚園・小学校に義手を持参していると答えた者は 22 名であった。持参している義手の種類は受動義手 16 名、筋電義手 15 名、運動用義手 1 名で、複数の義手を持参し活動に応じて使い分けしている対象児もいた。1 週間あたりの義手使用頻度は、「ほぼ毎日」が 18 名、「2～3 日」が 2 名、「1 日」が 2 名であった。対象児が義手を装着・使用するにあたり問題が生じたことが

あると回答した者は 8 名であった。問題の具体的内容は、義手の着脱に関するものが 7 件で、対象児の心因的問題、義手のソケットサイズや気温など環境的要因、義手の着脱手技が具体例として挙げられた。義手の取り扱いやメンテナンス、故障に関する問題は 5 件あり、筋電義手が故障しないよう特に配慮しなければならないこと、筋電義手が動かない原因がわからなかったこと等が挙げられた。義手使用時間の確保に関する問題も 1 件あり、使用場面が限られ十分な装着時間が確保できないという意見があった。

## 2. 学会参加と発表の印象

### 【学会について】

2023 年 4 月 24 日～27 日の 4 日間、メキシコのグアダハラで開催された国際義肢装具協会の学術大会、International Society for Prosthetics and Orthotics (ISPO) 19th World congress に参加した。私にとって初めての南米訪問、国際学会参加であった。学会には、海外学会の参加経験が豊富なリハビリテーション科医師とともに参加した。会場は EXPO Guadalajara で、規模の大きなコンベンションセンターであった。会場周辺には宿泊施設が多数あり、学会参加者を見かけることが多く、治安は想像よりも悪くなかった。メキシコで使用する言語はスペイン語で、ホテルや飲食店で英語が使用できないことも多く、スマートフォンの翻訳アプリが役に立った。

現地は日中の気温が 35℃以上と猛暑で、ややカジュアルな夏用の服装で参加した。海外からの参加者は、発表の有無に関わらず服装はセミフォーマルであり、感染症対策としてマスクを装着している参加者は日本人くらいであった。会場内には飲食ブースがあり、タコスやナチョスなどメキシコ料理を中心とした軽食の店や、日本食の店もあった。

本学会は義肢装具士が多く所属しているものであることから、国内外含め作業療法士の参加は少なかった。一方で、義手の分野では世界で活躍している著名な作業療法士らがシンポジウムや講演を行っており、圧巻であった。ディスカッションも国に関係なく積極的に交わされており圧倒された。分からない英語も多く調べながら聴いたり、日本的に流して受け応えしたりしてしまうことが多かったため、リスニング力や語彙力があればより有意義かつ楽しめたかもしれないと感じた。

機器展示では展示ブースが設けられ、海外の多数の企業が出展していた。義手に関連する企業のブースで展示物を見ていたところ、スタッフの方に「昨日の発表聞いたよ」と声をかけてもらえたことがとても印象に残っている。

全体を通して、プログラム構成や会場のセッティングは国内の学会と相違ないものの、その規模の大きさや雰囲気が異なるのは、やはり国際学会ゆえのことと感じた。

### 【発表について】

口述形式で、小児の義手に関するセッションで発表を行った。英語での発表や質疑応答に自信がなく、発表前に座長に挨拶をした際に緊張していることを予め伝えた。発表は 12 分

間、質疑応答は3分間であった。演台には小さなモニターがあり、手元のボタンを押しながらスライドを進めた。練習はしていたものの、頭が真っ白になりそうであったため原稿を印刷して臨み、結局ほとんど読み上げる形となった。

発表に関する質問は、フロアと座長からそれぞれ1名ずつあった。簡単な英語での質問であったが、緊張により何度も聞き返してしまったり、やや的外れな回答になってしまった。会場の雰囲気はとても温かく、座長や質問者からの言葉も優しいものだったことに救われた。発表後は、海外の医師や義肢装具士に声を掛けられ、ディスカッションしたり発表内容に関するコメントをいただいたりした。非常に大事な良い取り組みだとコメントしてもらえたことは、とても嬉しく思えた。拙い英語の発表であっても海外の方に伝わっていたことも嬉しく、自分の取り組みをもっと世界に発信できるよう英語学習を頑張りたいと感じた瞬間であった。

#### 【最後に】

国際学会は参加費が高く、また円安という状況のなか移動費も高額であったため、本助成金があれば参加が叶わなかった。発表をしたことで世界で同じような診療経験と問題意識がある医療者と知り合い関わることができ、機器展示では日本では見ることのできない義肢や装具を知ることもできた。そして、今後の作業療法士としての在り方について考えることにもつながった。日本作業療法士協会よりこのような貴重な機会を頂けたことに、改めて深く感謝申し上げる。

### 3. 文献

### 4. 論文掲載情報（学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載）